

## 6. スポーツと健康を切り口とした皆生温泉

### <トライアスロン誕生の秘話>

- ・ 皆生温泉開発 50 周年記念事業の一環として企画されたのがこのトライアスロンであった。当時、日本ではトライアスロンという名前すら知られていなかった。
- ・ 皆生温泉旅館組合の事務局長であった松田氏が当時を振り返る。

#### ☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 昭和 56 年春頃から皆生温泉旅館組合の開発委員会で 50 周年事業について検討を重ねてきた。なかなか決まらず困っていた。委員であった白扇の福本専務が週刊誌にハワイで行われたトライアスロン大会の特集を見つけて検討することになった。

- ・ 事務局長であった松田氏が調査することとなったが、何せ全く資料がなかった。新聞のコラムでハワイのトライアスロンに出場した熊本の医師堤先生の記事を見つけ、わらをもつかむ思いで連絡を取った。事情を話すと快く協力をいただけ、発案者の福本氏、東光園の石尾氏、松田氏の 3 人で九州へ赴いた。
- ・ そして、ハワイ大会の様子を聞き、皆生大会への夢を膨らませた。
- ・ 正式にトライアスロン皆生大会を開催することが決まり、準備を始めたのだが、これからが大変だったという。

#### ☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 一番苦労したのが警察との交渉であった。
- ✓ 堤先生からの話をそのまま警察で話したが。分からないものが、分からない人に話すのでなかなか意が通じない。結局、理解が得られないまま時が流れた。

- ・ とにかく関係する機関が多岐に渡るため交渉には時間がかかった。特に、自転車のコースが一番広域にまたがりことが分かり関係する市町村の役場を一つずつまわった。
- ・ 水泳競技には、海を使うため海上保安庁や漁協との交渉を行った。そして、最後まで残ったのが警察との交渉であった。

#### ☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ なんべんも足を運んだが結局国道 9 号線を横断することは、認められなかった。横断歩道を横切ることすら許されなかった。そこで、大山の山麓から自転車をスタートさせたり、国道を迂回して日野川の河原におりるコースを考え出した。

- ・ 水泳コースの選定にも様々な苦労があった。水泳競技は、当初現在のように海岸線を境港方面に進み折り返し地点をまわってくるコースが採用されていたようであるが、2 回目と 3 回目だけは沖に向かって泳いでいき折り返すコースもあった。
- ・ 当時、水泳部の副部長をしていた柴野憲史氏は振り返る。

#### ☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 海岸線沿いに泳いでいくコースを選んだ。
- ✓ 2.5 km の距離を車のメーターを使って測ったことを覚えている。学生時代水泳部に所属していた伝承者は、そのコースを試しに泳いだ。水泳には、自信があったがかなり大変であり所要時間は一時間以上かかると思っていた。

- ・ いよいよ大会当日の朝がやってきた。お世話になった堤先生をはじめ 56 名の参加者により、日本でのトライアスロンの歴史が始まった。最初は予算もなく宣伝活動もできなかったが、堤先生が熊本からたくさんの選手を連れてきてくれた、また第一回大会の優勝者となった高石ともや氏は招待選手ではなく一般選手として参加した。

☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 早朝、水泳のスタートに行ってみたところ、風で横断幕が倒れており慌ててなおしたことを覚えている。午前 7 時に河合米子市長のピストルの号砲でレースが始まる予定であったが、肝心のピストルが見えない。銃砲店の店主を探したが混乱した会場内を探ることができなかった。
- ✓ そこで、近くで工事をしていた住友建設の工事事務所に駆け込み、笛を借りて、ようやくスタートの時を迎えることができた。当時、河合市長はかなりの高齢であったため、ピストルの号砲とはほど遠い「ピリピリ〜」という笛の音でスタートした。元気良くスタートを切りたかった選手やスタッフには少し拍子抜けであった。

- ・ これが記念すべき日本のトライアスロン発祥の一齣である

- ・ 無事スタートを切ってホットしたのもつかの間、20 分ほどで水泳競技を終えた選手が帰ってきてしまった。最低一時間ぐらいかかると予定して準備をしていたスタッフを慌てさせた。

☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 先頭の選手はアメリカの選手で、五輪の代表候補に挙がっていたような選手であった。水泳のゴールの準備も、自転車コースの案内もまだできてない状況であった。

- ・ 当時、警備上の問題があり自転車のスタートまで車で選手を運ぶ段取りになっていた。水泳でゴールした選手を何人か集めて移動するため、トップでゴールした選手をかなり待たせることになった。その上、二台用意していた移動用の車が違う道を走ったため、後から水泳をゴールした選手が自転車で先にスタートするハプニングがあり、そのアメリカの選手はかなり立腹していたようだ。
- ・ 当時の混乱ぶりを象徴するようなエピソードである。

- ・ 初めてのトライアスロンの大会は、いろいろな人の心に深く残っているようである

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ とにかく言い尽くせないような思いで準備に取り組んだ。
- ✓ しかし、今振り返ってみるとやってみれば何とかなるものだと感じる。本気でやろうとすることが大事だ。
- ✓ すべてのことが心に残っている。とにかく選手たちにけがのないように、事故のないように願っていた。自分の人生の大きな一ページである。

- ・ 実際のこの後日本各地でトライアスロンの大会が始まったが、大きな事故を起こして多くの大会が中止に追い込まれたという。

☑ 伝承者 柴野憲史氏：

- ✓ 高石ともやさんがもう一人の選手と一緒にゴールを切り、初めての優勝者となった。閉会式の交流会の場で、優勝者である高石ともやさんがギターを片手に歌を披露してくれたときは、会場にいたスタッフや選手たちは皆感動した。短時間でいろいろなハードルを乗り越えてきた達成感と選手たちの盛り上がりで大変心を打たれた。
- ✓ 当時のことを思うと、楽しみながら取り組んだからできたのだと思う。みんな初めてのことで、暗中模索で準備を進めた。地元の人にも協力してもらいながらやっと実施にこぎ着けた。我ながらすごいことをやったと感じている。

- ・ トライアスロンを皆生温泉の地に誕生させた人々の話を聞いていると、開拓者精神が感じられる。これは、有本松太郎氏が100年前に思い描いた夢と相通じるものがあるように私には思える。
- ・ 何事にも夢を持ち立ち向かっていけば、大きな仕事ができることを彼らは実践した。

< トライアスロン皆生大会 25年の歩み >

- ・ トライアスロンを始めるのも大変な苦労があったが、それを続けていくのも大変な苦労があった。回を重ねる度に認知されるようになり、警察などからの国道の使用許可ももらえるようになった。協力いただけるボランティアの数も年々増えていった。大会関係者が一番頭を痛めたのは出場者の健康管理であった。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ 労災病院と連携して緊急時の受け入れ態勢を整えた。西部消防も積極的に協力してくれ救急車を待機させてくれた。熊本大学からも選手たちの身体を研究するために医療チームが駆けつけ、選手たちの健康チェックに一役をかってくれた。

- ・ 出場する選手たちにもいろいろな思いがあったようだ。第三回大会から出場して現在では大会のスタッフとして運営に当たっている柴野氏が当時のことを振り返る。

☑ 伝承者 柴野清氏：

- ✓ 当時、沖に向かう1.5 kmを泳ぐ往復のコースであった。下見のときに沖に浮かぶ折り返しの印が見えず恐怖を覚えた。その恐怖感で前日は一睡もできなかった。
- ✓ 当日、水泳と自転車は順調に終えるが、マラソンになり前日の睡眠不足がたたり睡魔に襲われた。目標を定めて目を閉じたままで走るような状況であった。

- ・ 当時はまだ競技用の自転車も一般的ではなくママチャリのような自転車で出場する人もいた。現在のようにエードステーションが完備されておらず、行けども、行けども飲み物にありつけないような状況であったという。
- ・ 住民の認知度も低く「あんたやちゃんにしとるの」と声をかけられたり、トラックの運転手から「乗っていけよ！」といわれる始末であった。

- ・ 第三回大会で大きな事故があった。皆生トライアスロンの功労者であった堤先生が水泳競技中に溺れるという事故が起こった。コースの設定から大会の運営まで堤先生から直接指導を受けた松田氏は当時のことを振り返る。

☑ 伝承者 松田芳彦氏：

- ✓ トライアスロンは本人がリタイヤするまで係員は手を出せないのが原則である。水泳競技の係員もずっと側にいたようであるが残念な結果に終わった。
- ✓ 自転車コースで事故の一報を聞き、急いで現場に駆けつけた。
- ✓ 皆生トライアスロンの生みの親である堤先生がこのようなことになり大変心を痛めた。
- ✓ その後、沖へ向かう水泳コースは、海岸沿いに泳ぐコースとなったという。

<皆生トライアスロンが生んだ名選手>

- ・ このような歴史を重ね続けてきたトライアスロン皆生大会であるが、その間いろいろな名選手を生んでいる。最も輝かしい成績を残した地元の星は、小原巧選手ではないだろうか。学生時代水球の選手であった彼は、皆生温泉のプールで指導者をするかたわらトライアスロンのトレーニングに励んだ。

☑ 伝承者 柴野清氏：

- ✓ 彼は 10 回大会ぐらいから出場したと思う。水泳は得意であったが、バイクが少し苦手であり、バイクの練習に大山の方まで連れていったこともあった。

- ・ 皆生大会を足がかりに全国にデビューした小原選手であったが、トライアスロンの第一人者としてトライアスロン界を引っ張っていく選手に成長した。1999 年の W 杯コナ大会で 10 位、アジア選手権 4 位となって世界のトップ選手となった。
- ・ トライアスロンが初めて正式種目となった 2000 年シドニーオリンピックでは、日本代表として活躍した。メダルの期待がかかった小原選手は、53 人中 21 位と日本人出場 3 選手の中で最も早くゴールを切った。
- ・ 現在指導者としても日本のトライアスロン界を支えている小原選手であるが、昨年行われた 24 回大会に凱旋出場し、みごと総合優勝をはたした。

- ・ このトライアスロンは、皆生温泉の旅館を中心に始まったものであるが、今や鳥取県西部地区を代表するイベントにまで成長した。トライアスリートたちからは、「日本トライアスロン発祥の地」であるこの皆生大会は人気が高いという。

- ・ 発祥の地と言うだけでなく、多くのボランティアが運営する地元の手作りの大会であることやフィニッシャーロードの感動が忘れられず毎年参加している選手も少なくない。トライアスロンを陰で支え続けた米子市観光協会事務局長の野嶋譲氏は語る。

☑ 伝承者 野嶋譲氏：

- ✓ トライアスロンの開催は、年一回三日間であるが毎年 400～500 人が皆生に来ることになる。関係者を含めると 20 年間で数万人が皆生を訪れたことになる。
- ✓ 彼らは皆生温泉に多くの思いを持っているはずである。開催期間中のみならず皆生温泉を利用してもらうような取り組みが必要である。

- ・ 皆生温泉にとってトライアスロンは大きな宝である。どこの大会が大きくなるうとも「日本で初めてトライアスロンを始めた」という冠は付けられない。また、25年もの間続いてきたことも一つの大きな歴史である。
- ・ 現在、トライアスロンのない残り362日皆生温泉にはトライアスロンを思わせる仕組みはほとんどない。トライアスロンの像が遊歩道にひっそりと立っているくらいであり、トライアスロンの躍動感や感動を伝えるものではない。

☑ 伝承者 野島譲氏：

- ✓ トライアスロンを通年型の観光資源として活かしていくことが必要である。
- ✓ フィニッシャーロードを整備して観光のポイントとすることもいいであろう。

- ・ 皆生温泉は、健康を切り口にした将来像を描いているが、トライアスロンは打ってつけの物語である。お金をかけて観光資源を新しく創るのもいいが、今ある観光資源を有効に活かしていくことが求められているのではないだろうか。

< 根強い人気にあるグランドゴルフ >

- ・ グランドゴルフは、昭和57年鳥取県泊村で考案されたオリジナルスポーツであり、高齢者を中心に大変人気のあるスポーツとなった。
- ・ 現在、全国各地で大会が行われており、2000人を越える参加者を迎えている大会もある。そのグランドゴルフの発祥の地が鳥取県である。泊村では、毎年グランドゴルフ発祥地大会が開かれている。

- ・ 皆生温泉でもかなり早い時期からグランドゴルフが普及していた。
- ・ 地元の愛好者が中心となって皆生温泉公園の空き地をグランドゴルフ場にした。土地を米子市から借り受け、コースの管理はすべて地元の人が行う。広いコースを自分たちで芝刈り、散水、草取りを行い、常に整備が行き届いており、管理される方の苦勞が伺える。

☑ 伝承者 内田政雄氏：

- ✓ グランドゴルフ人口は年々増えている。よく歩くので年寄り向けにはもってこいのスポーツである。しかし、あれだけのスペースでは大会が開催できない。

- ・ 皆生温泉の土地柄もあり、グランドゴルフ愛好者の中にも、旅館の関係者が多い。せっかく整備しているグランドゴルフ場を温泉の活性化に役立てようという気持ちが伝わってくる。グランドゴルフは、手軽に、誰でも楽しめるスポーツである。
- ・ 皆生温泉にとっても、健康を切り口とするコンセプトにあった観光資源であり、街づくりの計画に盛り込んでいくと面白いのではないだろうか。

< 皆生温泉 100 年の歴史を振り返って >

- ・ 「海に湯が湧き一世紀」その皆生温泉の歴史は海との戦いから始まった。多くの先人が夢を抱き、そして夢半ばにして挫折していった。新興の皆生温泉にとって玉造や三朝などの老舗温泉街は大きなライバルであり、追いつけ追い越せと懸命な努力を繰り返し、今の皆生温泉の基礎を作り上げた。
  - ・ また、トライアスロンを開催するため一致団結して一つのことに取りかかる情熱には感動すら覚える。まさに開拓者精神を思わせる歴史である。
  - ・ この 100 年間、住民、行政機関、温泉旅館そして温泉会社と一緒に皆生温泉の活性化に取り組んできた。しかし、ここに来て少しその絆が希薄になっていると感じる。皆生シーサイドホテルの社長である港氏は、私見として次のように語る。
- ☑ 伝承者 港紀一郎氏：
- ✓ 先人の遺業はすばらしいものだと思う。100 年前の都市計画は、もっと評価すべきではないかと思う。出来上がったものを引き継ぐのは簡単なこと。
  - ✓ テトラポットの存在も大きい。もしなければ今の旅館はなかったのだろう。
- ・ 今まで、長年皆生温泉の振興にたずさわってきた港氏は、街づくりの大切さを痛感しているという。
    - ✓ 今いろいろ取り組んでいるのだが、個人的にはもっと大きな目線で皆生温泉の将来を見据えた取り組みが必要だと思う。50 年 100 年先を見据えながら皆生温泉の基盤を整えていくことをする。
    - ✓ 何をキーワードにするのか？
    - ✓ 何をコンセプトにするのか？
    - ✓ みんなの目線を合わせていく必要がある。時間がかかるかも知れないが大事なことであり、行政や地元と協力しながら進めていく必要がある。
  - ・ 皆生温泉の今後のあり方について
    - ✓ 強烈なリーダーシップが必要である。「足して、二で割る」ような発想ではやっていけない。各旅館で集客ができる時代は終わった。
    - ✓ 地域全体で集客する時代であり、皆生の個性をいかに全国発信していくのが勝負になってくる。
  - ・ 50 年近くの間、皆生温泉の振興に関わってきた間瀬氏が皆生温泉の今後についてこう締めくくった。
- ☑ 伝承者 間瀬庄作氏：
- ✓ 皆生温泉の振興については大同団結が不可欠である。
  - ✓ 総論賛成各論反対の繰り返しでは皆生温泉の発展は望めない。
  - ✓ 皆生温泉への思いはつきないが、今回の伝承を皆生温泉の振興に是非活かして欲しい。